



TITLE:

初期獨占 - 特權的マニユファクチュアを中心として -

AUTHOR(S):

堀江, 英一

---

CITATION:

堀江, 英一. 初期獨占 - 特權的マニユファクチュアを中心として -. 經濟論叢 1949, 64(4-6): 349-373

ISSUE DATE:

1949-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132179>

RIGHT:

京都大學經濟學會

# 經濟論叢

第六十四卷 第四・五・六號

京都大學經濟學部創立三十周年

記念論文集

第二集

- アダム・スミスの價值論……………岸本誠二郎
- カレツキーの『獨占度』と分配機構……………島津亮二
- 原價計算法の理論的性格……………岡部利良
- 第一次大戰後の外資輸入……………堀江保藏
- 初期獨占……………堀江英一
- 財閥考……………靜田均
- 跋文

---

昭和二十四年十二月

# 初期獨占

——特權的マニファクチュアを中心として——

堀 江 英 一

## 一 序 説

チニードル王朝メアリー（一五五三—一五五八年）とくにエリザベス（一五五八—一六〇三年）即位頃から、イギリス資本主義は第一次國込運動を歴史的前提としてマニファクチュア段階に這入る。農村工業を基盤とするかかるマニファクチュアへの滑り込みは、絶對君主制の産業政策を大きく轉換させる。

農村小營業の展開とそれのマニファクチュアへの成長の氣配は當然都市商工業を衰頽せしめ、ここに農村と都市との經濟的對立が生ずる。まさに絶對君主化しようとする國王は都市と結合して農村工業を抑壓し、たとえばノウッチ（一四四二年）バリー・セント・エドマンズ（一四七七年）では周邊農村毛織業者を都市ギルド組織に編入し、或はスリウスバリー（一四七〇年）では都市毛織物商のウェールズ毛織物の買入を禁止制限し（G. Unwin, *Industrial Organization in 16th and 17th Century, 1904, Chap. III*）。さらにチニードル朝（ヘンリー八世（一五〇九—一五四七年）は農村毛織業者の外國人との取引を禁止し、ノウイツ・ブリッチボート・ウースターなどでは農村工業を禁止制限して都市

商工業を維持しようとした (W. H. Price; *English Patents of Monopoly*, 1906, p. 6, footnote 3). かかる農村工業抑壓政策にもかかわらず、農村工業の都市商工業抑壓が一般的となるとともに、メリーは「織工條例」(Weavers' Act, 1555) を、エリザベスは「徒弟條例」(Apprentice Act, 1563) の全國的立法によつて農村工業——ここでは既に農村マニユファクチュアを抑壓する。「織工條例」は、第一に農村織元の織機所有を一臺に、徒弟を二人に制限するばかりでなく、十年來毛織業のなかつた地方で新しく毛織業を開くことを禁止して、もつて農村毛織業とくにそのマニユファクチュアの發展を抑壓し、第二に織工の縮絨・染色兼業を禁止して、都市の毛織物商・仕上業者が仕上工程を獨占することを目的とする。ところで「織工條例」はすで農村工業抑壓政策の破綻を如實に示して居り、それはヨーク・カンバーランド・ノーザムバーランド・ウェストモアランドの北部諸縣をその適用から除外し、一五五七—八年の同様の法令はさらに當時の毛織地帯のほとんど全部をその適用外としてゐる (G. Unwin; *Ibid* Chap. II. W. Ashley; *Introduction to English Economic History etc* Chap. II など)。つまりかかる形態での農村工業抑壓政策が實行不可能であることを、法令自身が自認してゐることを示してゐる。

ところで、農村工業を抑壓しようとする都市の構成自身が働<sup>ウィッキング・マスター</sup>く親方と商人的親方と都市貴族とに分化し、都市貴族がギルドおよび都市の行政を支配するに至つてゐる。都市貴族は、都市手工業の衰頹を防ぎ得ないのであれば、農村工業の原料・製品を地方都市の自らの手を通過せしめて自己の地位を確保しようとする。そこで、たとえば、地方都市毛織物商は都市仕上業者 (Clothworkers) と結合して農村毛織物の都市通過を強制するために、既に一四八七年に毛絲や縮絨しない毛織物の輸出を制限する一四六七年の法律を未仕上織物にまで擴張し (ヘンリー八世治下數度確認。G. Unwin; *Ibid*, Chap. II) 遂に一六一四年のあの「ロッキーン計畫」(Cockayne's Scheme) ——アルダーマン・

コッケーンが未仕上毛織物（農村毛織物）を整理染色のうえ輸出することとし、しかもその輸出を四十都市に分散して地方都市毛織物商の利益を守ろうとし、そのため未仕上品を輸出してきたマーチャント・アドヴェンチュアラーズ組合（Company of Merchant Adventurers）にかわつて整理染色品を輸出する新マーチャント・アドヴェンチュアラーズ組合を作つた——にまで、それは體系化されたが、この計畫はあえなく失敗した（W.H. Price, *ibid.* p. 102）。さきの「織工條例」の第二の内容はまさしくこの線にそうものであつた。

かくして、絶對君主Ⅱ土地貴族Ⅱ都市貴族は、イギリス資本主義が漸くマニユファクチュア段階に滑り込んだメアリーとくにエリザベス即位頃を境として、農村工業、と云うよりマニユファクチュア抑壓政策の内容を轉換させねばならない段階に達した。絶對君主Ⅱ土地貴族Ⅱ都市貴族は結託して、獨占的特權的マニユファクチュアを基軸とする所謂初期獨占を、エリザベス即位間もない一五六〇年頃から創める。いわば自ら産業資本に轉化しようとし、ここに私的マニユファクチュアと類型を異にする獨占的特權的マニユファクチュアが展開する。

この轉換期は「織工條例」（一五五五年）「徒弟條例」（一五六三年）から初期獨占創始（一五六〇年頃）までの間、マニユファクチュア段階創始の時期と見て差支なからう。

## 二 初期獨占の展開

——獨占論争——

いわゆる初期獨占は、マニユファクチュア段階のはじまるエリザベス朝にはじまり、エリザベス・ジェームズ一世・チャールス一世の最盛期を経て、一六四〇—一六八〇年および一六八八年のブルジュア革命によつて廢絶される。

初期獨占は、従つてイギリス絶對君主制とマニユファクチュア段階との相重なる時代の現象であり、一四八五年にはじまるイギリス絶對君主制の後半期十六世紀後半にはじまるイギリスのマニユファクチュア段階の前半期の現象である。初期獨占のかかる段階規定は初期獨占の大體の性格を暗示する。

初期獨占は絶對君主が特定の個人または團體——多くは官僚および都市貴族——に一定産業の獨占的經營權を與えるところに成立し、従つてそれはかかる獨占的經營權を與える獨占大權をもつ絶對君主制を前提する (H. Levy: Monopole, Kartelle und Trusts, 1908, S. 5)。然し絶對君主制は初期獨占の法源であるにすぎず、初期獨占出現そのものを決定するものではない。初期獨占は、マニユファクチュア段階に這入るとともに漸く頭角をあらわしてくるマニユファクチュア資本家に對抗しこれを抑壓して、絶對主義とそれをささえる階級とが自らの物質的基礎を維持するために産業資本化しようとする形態である。従つて、絶對君主—官僚—都市貴族をめぐつて展開される初期獨占運動は當然にマニユファクチュア・ブルジュアジーの反獨占運動の反撥をひき起し、イギリスにおけるブルジュア革命運動の一齣を形作る。

わたしは、初期獨占の經濟的性格の分析を後述しにして、まづ初期獨占運動の展開とそれが議會でひき起す反獨占運動——「獨占論争」(Debates of Monopoly)との概略を示すこととしよう。そして、わたしは「獨占論争」が生み落した中間標たる一六二四年の「獨占條例」(Statute of Monopoly)を境として、それを二期に區分することとする。

## (一) 第一期 エリザベス・ジェームス一世時代

この時期の初期獨占は、専ら絶對君主が官僚または都市貴族に獨占的産業經營權をあたえる特許制度 (Patent System) を法的基礎とする。ところで、エリザベスが一六〇一年十一月三十日下院で、特許授與は「たとえ……朕の

舊臣えの個人的利潤を伴つたにしても朕の臣民全體の利益のためであり、朕の王者としての尊嚴は、その授與が臣民に苦痛と抑壓をあたえるなどと云うことを許さなう」(W.H. Price; *English patents of Monopoly*, 1906, p. 161)と述べているように、特許制度による初期獨占は表面上は發明助成・新産業育成を看板にしている。然し王室が特許料を得ることを目的として與える特許が官僚または都市貴族の手に這入る限り、それは全くの「掠奪組織」(W.H. Price; *ibid.*, p. 17)に墮ちる。當局が辯解する「濫用」こそ、初期獨占の本來の性格である。

エリザベスは一五六一一一五八〇年の二十年間に化學的製品十五件(石鹼・硝石・明礬・硫黃・油・鹽・硝子・布および革仕上陶器)・機械的發明十三件(浚渫機・排水機・製粉機・熔鐵爐・爐・帆布・カルタなど)・鑛山會社(Mines Royal et de Mineral and Battery Works)えの鑛山特權など多數の特許をあたえ、既にこのとき特許は新技術に限られなくなり、また特許期間も十年から二〇—二一—三〇年と延長されてきた。特許の「掠奪性」は一五八〇年代さらにはげしくなり、鹽製造だけに三つの特許があたえられ、新技術の發明者または移入者でない者に多數の特許があたえられるに至り(たとえば鹽・澱粉・鯨油・紙など)さらに一五九〇年以後は澱粉・鹽・鯨油・紙・硝子・酢の特許更新のほか革・新毛織物・綢・硝石採掘・居酒屋賭博宿の免許制が多くしかれた。ここでは既に、特許が發明助成・新産業助成でなく、全く王室と官僚都市貴族との財政目的の手段となつてゐる(W.H. Price; *ibid.*, p. 3)。なほエリザベス朝にはさきに述べたように、多くの特許貿易會社<sup>Patent Company</sup>が設立され、一般には「エリザベスの有名な獨占は専ら商業獨占であつた」(H. Levy; *Grundlagen des ökonomischen Liberalismus* 1912, S. 19)との印象をあたえてきたが、數から云えば工業獨占が遙かに多かつた。

かかる掠奪的な獨占特許はそれに抑壓され掠奪されるマニユン・アクチュア・ブルジュアジーをはじめとする人民

大衆の反撥を誘ひ、下院の反獨占運動——「獨占論争」を惹起した。一五七一年および一五九三年の議會ではじめて免許と獨占とに反對する聲があげられたが、王室側は下院が「彼等に提案される以外の國家問題に干渉すべきでない」とか「チェスカノを云うことが議會の權利であつて、聽いたことや考えたことを述べることはない」と、王室の議會に對する絶對的優越を主張し、議會自身も「かかる行動の無法と僭越」を自認するほど卑屈であつた (W.H. Price; *ibid.* p. 30)。然し一五九七年の議會では、反獨占運動は王室のかかる説教では鎮められない程に本格的となり、「特權および獨占の特許から生ずる害惡に關する」法案が下院に上程され、王室もその弊害の除去を約束せねばならなかつたが (W. H. Price; *ibid.* p. 20) 一六〇一年エリザベス女王最後の議會は「獨占論争」の坩堝となつた。そこで、ハイド (Laurence Hyde) は「獨占特許に關する普通法上の解釋」なる法案を起草上程し、獨占大權を普通法 (Common law) に從屬せよとした。「庭園第一の花にして王冠の最も大きな寶石」たる獨占大權を剝奪されることを恐れたエリザベスは、遂に十一月二十八日比較的有害な特許 (鹽・酢・酒類・魚の鹽漬包裝・鯨油・魚の脂肪肝臟・壺・麵粉・Polairs and milderix) を廢止し、その他の特許の合法性を裁判所の普通法による判決に委ねるとの「宣言」 (W.H. Price; *ibid.* p. 156-159; 全文收録) を布告し、同三十日議會で「黄金の演説」 (Golden Speech, W. H. Price; *ibid.* p. 160-162; 全文收録) を行つて漸く「獨占論争」を鎮めることができた。そして獨占の普通法への從屬は、ロンドン小間物商アレンがダーシーのカルタ獨占を侵害した訴訟事件 (Case of monopoly) で實證された。アレンの辯護士フラーは、普通法上の特許がただ「人が自らの負擔と勤勞または思付か發明によつて王國に新産業や以前使われなかつた産業増進の機具をもたらし、しかも王國のためになる場合」にのみ許さるべきであつて、ダーシーのカルタ獨占のようなその他の場合は普通法に反している、と主張して勝訴した (W.H. Price; *ibid.* p. 22-24)。



かくして、完全無缺を誇る絶対君主エリザベス女王の初期獨占運動は、「背後に人民をもつ」下院の反獨占運動の反撥をひき起したが、マニユファクチュア・ブルジュアジーを先達とする反獨占運動は、フーラーがさきの辯護で云つたように、「國家が國王のためにつくられてゐるのでなくて、國王が國家のため作られてゐる」とのブルジュア政治意識にまでたかめられて行つた。絶対君主—官僚（—都市貴族）とマニユファクチュア・ブルジュアを先達とする人民大衆との全面的對立、その表現としての絶対君主と下院との全面的對立、の萌芽と胎動は、エリザベス末期に明瞭に看取される。

ジェームズ一世時代になると、「獨占論争」は益々激烈となり、絶対君主と下院との激しい對立は議會の解散を瀕發せしめた。議會の解散は兩者の對立激化のバロメーターとなる。

ジェームズ一世は即位直後一六〇三年「宣言」を發して、獨占を非難し、樞密院が考慮するまで獨占を停止するよう命じ（W.H. Pree: *ibid.* p. 163）一六〇四年最初の議會で寵臣への恩賜——屢々獨占特許が恩賜として濫發された——の節約を約束したが、かかる約束が何になろう？ 一六〇六年一—五月の第二議會には獨占特許の惡弊除去を目的とする苦情委員會への苦情が増加し、一六〇六年十月の第三議會ではジェームズ一世は有害な特許をも國王の大權に屬するとして固執して唯々その慎重な實施のみを約束し、惡評高いレノックス公爵の新毛織物封印獨占を裁判所の判決に委ねることとした。一六一〇年の第四議會ではレノックス獨占についての王の約束不履行の責任が追求され、ジェームズ一世は始めて議會を解散した。一六一四年の「腐敗議會」では議會は議會收入から一萬磅を削減したので、ジェームズ一世はこれを解散して一六二一年まで議會を召集しなかつた。ジェームズ一世は議會外

收入の一つの財源を獨占授與に求めたが、かくて「王治世の中期は特許の性格においても數においても悪い方への轉換點を劃した」(W.H. Price; *Ibid.* p. 25-30)。

財政の遺線のつかなくなつたジェームズ一世はやむなく一六二二年議會を召集したが、そこには絕對主義的王權神授論者への攻撃が待ち受けていた。即ち一方では「獨占論争」が激化し、モンブゾン卿・ミケル卿が寵臣バッキンガム家の三特許(居酒屋・ビール店の免許・金銀糸獨占)に反對した。上院はミケル卿から騎士爵と公職とを剝奪し、モンブゾン卿は逃亡したが、王もやむなく「宣言」によつて三特許を廢棄し、議會終了後十八特許を拒否し、十七特許を普通法の審判に委ねた(W.H. Price; *Ibid.* 31-33)。他方では、ジェームズ一世が「國家の最高事項」決定に關する國王の絕對的大權を主張するのに對し、議會は自由・權利・特權がイギリス人の生來のまた歴史的の權利であり、議會が國務を處理する權利をもつとの「大反抗書」(the Protestation)を出し、絕對君主制を眞正面から攻撃した(今井登志喜『英國社會史』昭和二十四年二一七頁)。王は議會を解散した。一六二四年最後の議會は、藏相ミヅルセックス伯を彈劾失脚させ、王の反對を押し切つて「獨占條例」(Statute of Monopoly, W.H. Price; *Ibid.* p. 133-141 載録)を通過させた(*Ibid.* p. 30-31)。エリザベス朝に胎動する「獨占論争」それを孕みつつ展開するブルジュア革命的要求は、ジェームズ一世時代には遙かな成長を見せている。ジェームズ一世のあの王權神授説や議會の解散などの強がり、絕對君主制の孤立化を陰蔽しようとする虚勢にすぎない。

では、「獨占條例」とはどんなものであろうか？ 議會によつてあたえられた有効期間中の獨占および發明者に對するこれまでの特許(將來二十一ヶ年)を除く獨占は、一般的に普通法に違反して無効であり、將來といえども普通法に照して檢討さるべきであるとの從來の下院の主張が強調されている。然しそこには大きな抜穴が用意されてい

る——即ち〔Ⅰ〕印刷・硝石・火藥・火砲・彈丸・明礬・ニューカッスル石炭・マンセルの硝子・マックスウエルの仔牛皮・ペーカーの酪母・ダッドリーの熔鐵など重要な獨占が除外され、議會で公認され、〔Ⅱ〕新發明には將來十  
四ヶ年間の特許があたえられ、〔Ⅲ〕團體 (Gris Corporations and Companies) には獨占があたえられる。かくして、こ  
の「獨占條例」は殘された獨占のほかに、新發明にかくれ特に團體と結合して、新しく獨占を展開する充分な餘地  
を残してゐた (W.H. Price; *ibid.* p. 135ff. H. Levy; *Monopole, Kartelle und Trusts*, 1909, S. 13ff.)。「獨占條例」を契機とし  
て、新しい形態の獨占が展開する。

### (二) 第二期——チャールス一世時代

チャールス一世の治世一六二五—一六四九年の二十五年間に七回の議會が召集されたが、そのうち五回解散され、  
解散されなかつた二回の議會のうちの二八八年議會はチャールス一世に手痛い打撃をあたえた「權利請願」(Peti-  
tion of Rights) を通過せしめ、一六四〇年秋の「長期議會」は絕對君主制を破碎しチャールス一世の首をも飛ばした  
あのクロムウェル革命の序曲となつた。議會を召集しなかつた一六二九—一六四〇年の親政時代はイギリス絕對君  
主制が議會と人民大衆とをものはや統禦し得なくなつた證據であり、一六三五—四〇年の「徹底政策」は徹底した彈  
壓によるほか絕對君主制を維持できなくなつた證據であるが、實はチャール一世のかかる虚勢こそ絕對君主制を覆  
滅するブルジュア革命の到來をはやめたのである。

チャールズ一世は、議會との眞正面からの衝突のために議會の承認を得た議會收入を得ることができず、議會外  
收入とくに獨占許與を漁り求めざるを得なくなつた。かくして、獨占は本來の技術育成の目的を全く離れて最も多  
くの賃料を支拂うものゝ賣買され、賃料も一定の貨幣または製品に固定され或は生産量に比例して契約されるに至

り、獨占は「徵稅組織」(W.H. Price, *ibid.* p. 41)に轉化し、事實獨占賃料は共和制時代にはじまる消費稅の先驅となつた。

ところで、さきの「獨占條例」は特許による新しい獨占の形成の道を疎止していたので、チャールス一世は「獨占條例」の第三の板穴——團體の獨占を利用した。彼は新技術の發明移植の獎勵を目的とした特許制度でなく、ギルド・組合・會社に法人格をあたえる勅許狀(Royal Charter)を濫用した(W.H. Price, *ibid.* p. 33-36)。恰かも、これよりさきギルド内部には、都市貴族と働く親方(「小親方」)層とが社會的に分化し、働く親方層は小生産者層の本能たる獨占慾をもち資金不足に悩んでいた。そこで、官僚または都市貴族が仲介者または金融者として、財政的に迫られた國王と獨占欲にかられた小親方層を仲介して、小親方層を團結せしめて獨占會社とする。従つてこの獨占團體は、官僚または都市貴族と國王との二重擲取にさらされることとなる。この所謂スチュアート・コーポレーション(Stuart Corporation)がチャールス一世時代の獨占の特徵的形態である(Urwin, *Industrial Organisation*, 1904, Chap. V. Do, *Gilds and Companies of London*, 1908, Chap. XVII)。

チャールス一世は長老派の支配するスコットランドに國立教會を強制しようとして、逆にスコットランド軍隊にイングランド中部まで占領された。絶對君主制に憤激する人民大衆の關心を外に向けようとしたチャール一世は、逆にそのために運命を決定されることとなつた。チャールス一世は一六四〇年春の短期議會開催の準備として、一六三九年三月三十一以上の獨占を廢止する命令、同年六月さらに多くの獨占を廢止する宣言(W.H. Price, *ibid.* p. 171-175に收録)を發して人民大衆の憤激をしづめようとしたが、短期議會はチャールス一世攻撃の埒場となり、三週間にして解散された。一六四〇年秋の長期議會は初期獨占とともにその基礎たる絶對君主制を吹きとばしたばか

りでなく、チャールス一世の首までとばしたクロムウェル革命の序幕となつた。(註一)

註一 土地貴族・都市貴族(商人貴族および金融貴族)とブルジュアジーを先頭とする人民大衆との階級闘争——ブルジュア革命運動は、云うまでもないことであるが、經濟・政治・文化・宗教など人間生活の全領域における闘争である。そして、イギリスの場合、イエリネックが「十七世紀は宗教の世紀である」と云つてゐるように(Jelinek, G., Erklärung der Menschen und Bürgereiche, 1904, S. 49)その闘争は著しく宗教的色彩をもっている。そこから、たとえばマックス・ウェバーやヘルマン・レヴィーのように、宗教の相異が全闘争の基底であり、それによつて經濟・政治・文化の方向が決定されると云うような倒錯した觀念論が生れてくる(Max Weber: Die protestantische Ethik und der Geist der Kapitalismus, H. Levy: Die Grundlagen des ökonomischen Liberalismus)。

本稿の主題たる初期獨占問題は、政治・文化・宗教における對立が實は物質的經濟的對立を基底としてゐるという簡單な眞理を、具體的によく示してくれる。われわれは、この問題をイギリス・ブルジュア革命運動の一基底として取扱う。

### 三 初期獨占の經濟的性格

—— 初期獨占の實例 ——

わたしはこれまで初期獨占の展開とそれをめぐる議會闘争とをブルジュア革命運動の一齣として取扱つてきた。だが、初期獨占とは一體いかなるものであるか？ それをあきらかにするために、ここで二つの實例をあげることにする。

既に述べたように、初期獨占はエリザベス・ジヌムズ一世・チャールス一世の治世に普及した。コールベツパー(Sir John Colepeper)は一六四〇年長期議會で、「これらは(初期獨占：筆者)モジプトの蛙のように、われわれの住居を占據し、われわれはそれから自由な部屋もない。それはわれわれのコップを、われわれの皿を吸り、われわれ

の爐邊に坐つてゐる。それは染槽洗濯火藥槽のうちにゐる。それは酒場で賄方と分ち合つてゐる。それはわれわれの頭から足までマークし封印する。それはわれわれにビン一本もまけなす」(Parliamentary History, Vol. II, p. 634-5. H. Levy; Grundriss des ökonomischen Liberalismus, 1912, S. 35 より)と、初期獨占の氾濫を諷刺した。

こうした無數の初期獨占のうちから、わたしは硝子獨占と石鹼獨占との二つだけを取り出してみよう。さきに述べたように、初期獨占は一六二四年の「獨占條例」によつて形態變化を餘儀なくされたのであるが、わたしは硝子獨占をしてエリザベス・ジェームズ一世朝の初期獨占を代表せしめ、石鹼獨占をしてチャールズ一世の初期獨占を代表せしめることとする。

### (一) 硝子獨占

レヴィーが「鹽採掘業とガラス工業とははじめから資本主義的基礎のうゑに組織されていた」(H. Levy; Monopole, Kartelle und Trusts, 1908, S. 34)と云つてゐるように、ガラス工業が十五—十六世紀イギリスに輸入されたときから、それはマニユファクチュア形態をとつてゐた。ガラス工業における初期獨占は、エリザベス朝の一五七四年ヴェニス人ギアコポ・ヴェルサリニ(Giacopo Versalini)の酒杯特許から、ジェームズ一世朝の一六一五年マンセル(Sir Robert Mansel)の完全獨占を経て、長期議會の一六四二年まで、約七十年間つづく。然しイギリスのガラス工業は初期獨占によつてはじめて移植されたものでなく、十五世紀以來移植發展しつゝあつたガラス工業が初期獨占によつて疎止された。レヴィーがガラス工業を「あきらかにきわどい性質のものであり、従つて特にはげしい競争をよび起しそうでない新工業部門」と云う場合、彼は「自然的に」發展しつゝある私的マニユファクチュア——いわゆる「獨立ガラス製造業者」(independent glass makers)と初期獨占との對立を見落している。

十五世紀には、イギリスのガラス工業は粗悪な窓ガラス、とくにサセックス鐵工業地帯では緑色塩ガラスを生産し、一般人の常用に供用していたが、十六世紀に這入るとともに多数のネーダランド人・ヴェニス人・イギリス人のちにはフランスを逃れたユグノーのガラス製造場が設立され、エリザベス朝には十五人の製造業者がサセックスとサセックス・サー境界に集中していた。然し當時のイギリス硝子工業は解決すべき二つの問題をもつていた。その一つは精巧品とくに酒杯とカット・グラスは大陸から輸入されていたので、その技術を導入し輸入を防止する問題である。もう一つは燃料の問題であり、従来は燃料として木材を使用していたため、ガラス工業はサセックスやケントの木材を切り盡し、森を追つてデーン森・スタッフォード縣・ウースター縣と西漸して行つた。木材にかわつて石炭を使用する問題が、とくに舊立地たるサセックス・ケント・サリーのガラス製造業者の緊急問題となつた。ガラス工業における初期獨占はこの二つの問題をめぐつて展開される。

一六一五年のマンセルの全面的獨占到至る契機は一五七四年ヴェルサリニの酒杯特許にはじまるが、これよりさき一五六七年ネーザランド商人カーレおよびベック (Corte and Becken) がドイツのローレン法によるガラス製造特許を獲得し、ネーザランド人のブリエツト (Briet) をはじめとする労働者を使つて三つの作業場を設立した。然しブリエツトなどの労働者の歸國によつて、カーレおよびベックの作業場は失敗し、彼等はローレン法によるガラス新製造業者から特許料をとる單なる利權屋 (Privilege-monger) と化してしまつた。かくして、ローレン法ガラス製造は國王の保護なしに發展し、カーレおよびベックの特許はガラス工業の發展を疎止することとなつたので、一五七六年特許更新願は却下された (W.H. Price; English Patents of Monopoly, 1906, p. 67)。この特許はその後の初期獨占到繼承されることなく終つた。

ガラス製造業における全面的獨占は、次の三つの契機の統一からなる。「I」ベルザリニ——ボウエス——ハートおよびフォーセットの酒杯特許。既に述べたように、エリザベス朝初期には酒杯およびカットグラスのような精巧品は大陸諸國から輸入され、輸入防止のため國內生産を起す必要があつた。そこで、「I」一五七四年イタリー人キアコボ・ヴェルサリニに、二十一年間の酒杯製造獨占權と輸入禁止が許されたが、一方では一ケ年たないうちにその作業場は焼失し、他方では「獨立ガラス製造業者」の特許侵害が瀕發し、その事業は失敗した。「II」そこで第一の特許の失敗したことを表向きの理由とし、實は毎年一〇〇磅の賃料を取得し王室への個人的貢獻に報ゆるためにエリザベスは一五九二年あらためて廷臣ボウエス (Sir Jerome Bowes) にヴェルサリニが享受したとほぼ同じ特權をあたえた。ここでは特許制度は新技術の保護でなく、全く獨占特權に轉化した。「III」デュームズ一世の一六〇七年ボウエスの獨占特權は、ボウエス死後三ケ年にはじまる二十一年間を條件として、ハートおよびフォーセット (Hart and Forcell) に受けつがれた (W.H. Price; *ibid.* p. 69-70)。「II」ソールターの特許。ソールター (Edward Salter) は一六〇九年これまでの特許にふくまれていないある種のガラス特許を獲得した (W.H. Price; *ibid.* p. 70)。「III」スリングスビーの石炭使用によるガラス製造特許。これも既に述べたように、イギリスの當時のガラス製造業は精巧品の國內生産のほかに、もう一つの問題——漸次涸渇する木材のかわりに石炭を燃料として使用する問題をもつていたが、石炭使用によるガラス製造特許は一六一〇年エリザベス女王お抱え彫刻師の廷臣スリングスビー (Sir William Slingsby) にあたえられた。スリングスビーの製造方法はドイツ・ハンガリーの方法を一貧者から詐取したものであるばかりでなく、當時既にフランスから移住していたエグノーからなる「獨立ガラス製造業者」がその方法を使用していた。特許は完全に利權に轉化した (W.H. Price; *ibid.* p. 71)。この特許は翌年廢棄され、ガラス製造にニュー



カッスル石炭を使用する同じ排他的特權がズーチ・テールウォール・パーシヴァル・メフリンに授與された。中心人物ズーチ (Sir Edward Zouch, 1556-1635) はハリングウォースのズーチ男爵十一代の當主で、あのウィリアム・セシル卿 (Sir William Cecil) の寵愛する廷臣であつて、かのヴァージニア會社の重役 (一六〇九年) となつたり、ヴァージニアに船を送つてニューイングランド議會の初代議員となつたりした廷臣資本家 (Capitalist courtier) であつた (Dictionary of national Biography, Vol. 32)

かくして、新技術の保護育成を本來の目的とする特許制度が王室——廷臣資本家の獨占のための利權に轉化した以上、全面的獨占えの道は坦々たるものであつた。それは二つの過程を通じて達成された。「I」石炭によるガラス製造特許をもつズーチ一派はボウエスの酒杯特許およびソルターの特許を、一六一四年彼等えの年金一、〇〇〇磅の代償によつて譲棄せしめて、それを自らのうちに統一し、かくしてズーチ一派は三つの特許を統一することとなつた。ところで、これは「獨立ガラス製造業者」の壓迫であり彼等の反對に遭つたが、樞密院はサツセクユのユグノーたるハンゼイ家・チイザック家のものとスタツフォード・ウースターのユグノーたるチイザック家のものを逮捕せざるを得なかつた (W.H. Price: *Ibid.* p. 71-72)。「II」ズーチ一派は一六一五年さらに自己の地位をかためるために、モントゴメリー伯 (Herbert Philip, Earl of Montgomery, 1534-1650) およびマンセル (Sir Robert Mansel, 1573-1656) の二有力廷臣資本家を。パートナーに加え、遂に「獨立ガラス製造業者」の競争を排するために木材燃料の使用を禁じ又ガラスの輸入を禁ずるジェームズ一世の「宣言」を獲得し、遂にマンセル一派は全ガラス製造と國內市場とを獨占してしまつた。ところで、かかる完全獨占はガラスの品質をおとし供給を不足せしめ價額を騰貴せしめたばかりでなく、マンセルの作業場自身で「宣言」に違反して木材を使用していたので、「獨立ガラス製造業者」はマンセ

ルの獨占を犯し、或は國外に退出しようとして、逮捕され沒收され罰金刑に處せられた (W.H. Price; *ibid.* p. 79-74)。  
ところで、この獨占の中心人物マンセルはエトワード・マンセル郷とウースター伯の娘とを兩親とし國爾尙書ニコラス・ペーコンの娘を娶つた程の家柄の海軍提督であり (Dictionary of National Biography, Vol. 12) モントゴメリー伯は同時に母方のペムブローク伯家をつぐジュームズ一世第一の寵臣であり、ヴァージニア會社・東印度會社その他のメンバーとなつた廷臣資本家であつた (Dictionary of National Biography, Vol. 13)。マンセルのガラス獨占は私的マニユファクチュアの發展を疎止するばかりでなくそれを完全に排除して、絶對君主と廷臣官僚が獨占利潤を獲得する手段であつた。

ガラス獨占はその形成期たる一五七四—一六一五年に既に「獨立ガラス製造業者」——私的マニユファクチュアの反對を抑壓しつつ形成されたが、このマンセルの獨占到對する「獨立製造業者」の反對運動は益々はげしくなり、一六一四・一六二一とくにあの「獨占條例」が通過した一六二四年の議會ではマンセル獨占は非難的となつた。然しそれが廢止されたのは長期議會の一六四二年であつて、それ以來市民戰爭中にかかわらず「獨立ガラス製造業者」——私的マニユファクチュアは自由に發達し、十七世紀末にはニューカッスルを中心として約九〇の作業場があり、しかもその三分の一は高級ガラス生産に従事した (W.H. Price; *ibid.* p. 74ff. H. Levy; *ibid.* S. 47-48)。かくしてイギリスのガラス製造業は絶對君主廷臣資本家の特許制度にかくれた獨占——特權的マニユファクチュアの基礎のうえに發展したのでなく、その廢棄——營業自由のうえに「獨立ガラス製造業者」——私的マニユファクチュアを基礎として發展したのである。兩者の對立は火を見るより明らかである。

## (二) 石鹼獨占

石鹼は消費手段としてはかりでなく、當時のイギリス産業の要幹たる羊毛工業に缺くことのできない補助的生産手段であつたが、この石鹼製造業はエリザベス朝にイギリスに移植され、専ら「獨立石鹼製造業者」(independent soap boilers)によつてロンドン周邊に營まれ、一六三一年にはロンドンの主要な「獨立石鹼製造業者」だけでもほぼ二十に達した(H. Levy; *ibid.* p. 6 and p. 34)。ところで、石鹼は加里と油脂との化合物であるが、これらとくに鯨油は大陸諸國から輸入されていた。石鹼獨占はこの原料をめぐる展開する。

石鹼獨占はジェームズ一世末期の一六二三年に萌し、チャールズ一世の時代に完成するのであるが、それはさきの硝子獨占と異りチャールズ一世朝の特徴たる結社形態をとり、それも都市貴族の結社形態に推移して行く。ここに石鹼獨占と硝子獨占との相異が見られる。

石鹼獨占は次の三つの變化をとげる。即ち「I」ブーキエル(Sir John Bourchier)の二人の被護者が豆殻灰海草灰など國產原料を使用する硬石鹼の製造特許とその特許侵害を防ぐための「獨立石鹼製造場」検査權を、「獨立石鹼製造業者」の反對を押し切り國王に順當り二磅または年二萬磅と三萬五千磅のダイヤモンドを献上する約束のもとに獲得したが(G. Unwin; *Gilds and Companies of London*, 1908, Chap. XVII)。この特許權はほとんど利用されなかつた(W. H. Price; *ibid.* p. 119)。「II」ところが、一六三一年チャールズ朝に大藏卿ウェストン(Sir Richard Weston)およびコッテングトン男爵の支援のもとに數人の廷臣が「ウェストミンスター石鹼製造者組合」(The Company of Soapmakers of Westminster)を設立してさきの特許を買收して、「(イ)毎年硬石鹼五、〇〇〇噸を生産して國王に順當り四磅または年二萬磅を献上し、(ロ)「獨立石鹼製造場」検査權を獲得し、(ハ)原料たる獸脂灰の輸出と加里の輸入との禁止を獲得した。一六三二年組合はさらに石鹼加里の輸入を禁止、また石鹼製造に獸脂とくに鯨油の使用を禁止植物油を

使用すべき命令を獲得したが、これによつて輸入加里と鯨油に依存していた「獨立石鹼製造業者」の存続は不可能になり、全石鹼製造業がこの組合の獨占領域となつた。特許は今や完全な獨占特權に轉化した。だが、組合はこれで満足せず、一六三三年星法院 (Star Chamber) をして新規親方の開業とロンドン・ウエストミンスター・プリストルから一哩以内での石鹼製造を禁止せしめて獨占を完全なものとしたが、獨占を完成した組合は自らの獨占形成のための命令を故紙として、一六三四年には組合が舊法たる鯨油を使用する許可を獲得した (W.H. Price; *ibid.* p. 119-120. H. Levy; *ibid.* S. 4 und. S. 30-32)。「ウエストミンスター石鹼製造者組合」は、われわれの知る限りでは、廷臣資本家の組合であり、廷臣資本家が「獨占條例」を脱法する方法であつた。〔Ⅱ〕ウエストンおよびコッティングトンに代つて、カンタベリー大僧正ロード (William Land) と新大藏郷が實權を握るに及んで、その庇護者たるロンドンの有力「獨立石鹼製造業者」は「都市貴族七八人が「ロンドン石鹼製造者組合」 (The Company of London Soapmakers) を組織して、一六三七年に「ウエストミンスター組合」の獨占特權を四萬三千磅 (うち八、〇〇〇磅國王へ、六、〇〇〇磅訴訟費用、ウエストンへ數千磅)、設備原料二萬五千磅で買收して同一特權を獲得し、國王に順當り八磅を支拂うこととした (W.H. Price; *ibid.* p. 123-125. H. Levy; *ibid.* S. 30-32)。かくして、石鹼獨占は廷臣資本家の結社から、廷臣に庇護された都市貴族の結社に移つた。

かかる獨占はもと「獨立石鹼製造業者」の競争排除のうえに成立するものであり、従つてそれは絶えず彼等の非難と特權侵害とにさらされ、逮捕投獄されるものが多かつた。そればかりでなく、獨占は一六三四年チャールズ一世の宣言さえ認める通り石鹼價格を封度當り二片から六―十二片まで騰貴せしめ、そのため大衆的反對を受けた (H. Levy; *ibid.* S. 32)。「ウエストミンスター組合」の石鹼はイギリスの敵法王にちなんで「法王の石鹼」 (Papish

Soap) と呼ばれた (W.H. Price; *ibid.* p. 122)。この石鹼獨占は、長期議會クロムウェル共和制になつて、多くの獨立生産者の反對にもかかわらず、一六四三年以來賦課されることとなつた消費税 (國王におきめていた賦課金の轉化形態) 徴收上の必要と元の石鹼製造業者の結社であるとの理由で、存続を許され、少くとも一六五六年頃までは健在であつたが、その後の詳細はあきらかでない (W.H. Price; *ibid.* p. 125-126)。

初期獨占は、手工業段階におけるかのブニツビヤーの所謂「都市經濟」とそれに立脚する分權的封建政治體制の解消否定のうえに、マニニファクチュア段階における全國經濟と中央集權的絕對君主制のうえに成立する。

(一) 初期獨占の全國經濟的性格。ヘルマン・レヴィーは云う——第一に「多くの單純な地方的生産地が自然的經濟的理由や運輸手段のため一國の遠隔地まで供給するために、かかる地域における獨占が全國的獨占となつた。第二に、その創設者が法律によつて全國唯一の製造場の特權を獲得しまた獲得しうる新産業がある場合には、獨占の全國への擴大が生じた。最後に獨占の全國化は數個の獨占とくにクラフト・ギルドの合併や特定の組合によつて獲得された他のギルドに對する支配から生ずる」(*ibid.* s. 38-39)。硝子獨占と石鹼獨占とは、初期獨占がギルド獨占と異なる全國的獨占であることを示している。

(二) 初期獨占の絕對主義的性格。ギルドの場合、それを成立・存続・廢止せしめる權力的基礎は地方自治都市であるが、初期獨占の權力的基礎は中央集權的絕對君主制であり、初期獨占が全國的獨占たる根據も一つはここにあつた。初期獨占の重要な動機は「王室と、その利潤を賃料の支拂によつて國王と分ち合う特許人との、双方の財政的利益」(W.H. Price; *ibid.* p. 16) であり、「獨占の許與は、種々の資本主義企業に關係する金錢上の利害關係者と

常にひとしく新財源を開こうとしている王室とを結ぶ鎖を提供した」(H. Levy; Grundlagen, S. 20-21)。ここに云う「特許人」・「種々の資本主義企業に關係する金錢上の利害關係者」——當時の所謂「獨占者」は上述の實例が如實にこれを示している。「獨占の多くは、富を増大しまた資本家の援助と富裕になるために、その特權を利用しようとした寵臣・退職官吏・軍人に、國王が現金にかゝる特殊の恩恵としてあたえたものであり」(H. Levy; Monopole usw. 55)。「彼(チャールズ二世…筆者)の廷臣は獨占許與と獨占投機とに極めて密接な關係をもつてゐる。高位の貴族や退役陸海將軍は排他的權利や利權をうるために王室との關係を利用し、自ら金融者や獨占者にならない場合には、殆んど常に政府と起業者(Proceder)との間の媒人として動いた」(H. Levy; Grundlagen S. 21)。これに、ギルドの内部的分化によつて生じた都市貴族を加えるならば、われわれは獨占者を殆んど盡したことになる。かくして、初期獨占は絶對君主制を權力的基礎とし、絶對君主とそれをささえる官僚貴族・都市貴族のための營利手段であつた。一六四一年ある著者は石鹼獨占について述べていた——「多くのロンドン市民は、その仕事に育てられたことのない騎士・郷士・紳士によつて、泡沫計畫や眞實でない新發明の口實のもとに、すつとそれで育ち唯一の生活手段である元の職業から閉め出されている。星法院でのロンドン石鹼製造業者への迫害は…常軌を逸し、漁油を使ひ(獨占者の…筆者)検査人に服従しなかつた者は巨額に罰金を課され、三回もほぼ二十ヶ月投獄され、品物は差押され、鍋や脂はこわされ、高價な家は使ひものにならないようにされ、家族は分散窮迫し、財産は殆んど破壊されぬ」(A Short and True Relation concerning the Soap Business, 1641, p. 27. H. Levy; Monopole usw. S. 31-32 4a)。P. 4

ニファクチニア・ブルジュニアジを先頭とする獨立生産者——初期獨占の價格吊上・品質惡化・供給不足に悩む人

民大衆と初期獨占——絶對君主制とは眞正面から衝突する。「獨占論争」はかかる人民闘争の議會的表現である。

### (三) 初期獨占のマニユファクチュアの性格

初期獨占は、絶對君主が擡頭する私的マニユファクチュアに對抗して自らの階級支配を維持するために創設した獨占的特權的マニユファクチュアである。それは獨占的特權の恩恵のもとに私的マニユファクチュアと比較にならない巨大マニユファクチュアであつた。さきに述べた硝子獨占のマンセルは、一六二四年議會の「獨占條例」論争で、ニューカッスルの彼の硝子製造場で四、〇〇〇人の労働者を雇傭していると誇稱し(W. H. Price; *ibid.* p. 74. *It. Levy; ibid.* S. 3-4) 一六〇七—一六四八年榮えた獨占ローヤル・アラム・ワークス(Royal Alum Works)では、一六一二年それで八〇〇家族が生計を立て、それがもつていた六作業場のあるものは六〇人(*It. Levy; ibid.* S. 3) また五〇〇人(W. H. Price; *ibid.* p. 48-49)の労働者を雇傭し、更に一五九〇年來獨占を形成したニューカッスル石炭業では一六四九年抗夫總數千人、一傭主が五〇〇—一、〇〇〇人の抗夫を使つてゐたと云われる(*It. Levy; ibid.* S. 7-9)。これらの労働者がいかに配置されていたかを示す好例は、銅鑛採掘精鍊獨占のMines Royal會社のケズウィック・コロニーである。そこではビュリタン革命前四、〇〇〇人の労働者が使われていたが、「それは實に産業の密集であつて、そこには各種の労働者がやとわれていた。……鑛石が地表にもたらされると、それは抗の近くに設けられたstamping-houseで選鑛され、破碎されねばならなかつた。ニューランドのあるstamping-houseでは、通常十人から十二人の人をやとつて、その中にある程度の分業があつた。……それから鑛石は種々の鑛山からケズウィックの製鍊所におくらねばならなかつた。運搬の業務は……きはめて重要な部分をなして……多人數がやとわれていた。……製鍊所での雇傭人數はまちまちだが、ある場合は、二十五人と一碎鑛夫及び一監督、他の場合には十三人をや

とつてゐた」(H. Hamilton; English Brass and Copper Industry, p. 86-88 大塚久雄『近代資本主義の系譜』昭和二十二年一七七—八頁より)。それはまさしく巨大マニファクチュアであり、フランス人の云う「大工業 (La Grande Industrie)」である。ところで、かかる獨占的特權的「巨大マニファクチュア」は獨占的特權による手厚い保護にもかかわらず、多く失敗している。たとえば、さきに述べたローヤル・マインズ會社の中心經營ケズウィツク・コロニーでは、一五六四(創立)——一六〇〇年の三十七年間に會社その他に二七、〇〇〇磅の損失をかけ、遂に會社は自ら經營を放棄して王室からうけた特權を個人その他の鑛業者に賃貸して、王室に支拂う賃料と賃賃料を搾り出す私的鑛業者の寄生的存在となつた (Wall price; *ibid.* p. 51-52)。かかる現象は、ミネラル・アンド・バターリー・ワークスにもローヤル・アラム・ワークスにもその他にも多く見られる現象であつて、かかる初期獨占は私的マニファクチュア・ブルジュアジーを先頭とする人民大衆を喰物とする官僚貴族——都市貴族の利權にほかならない。初期獨占は、たとえて見れば、帝國主義段階における獨占資本の延命策としての社會化——國有化とひとしく、一國の經濟を荒廢破滅せしめるものであつた。

#### 四 初期獨占の没落

##### —— 營業自由 ——

初期獨占は特種イギリス的現象ではない。フランスのルイ十四世治下では、いわゆる「大工業」——國立マニファクチュア・王室マニファクチュア・特權マニファクチュア——がフランス織物の三分の二を生産したが、それは小規模工業の根強い抵抗を防ぎ得ず、保護政策の放棄されたルイ十五世治下では織物の三分の一しか生産し



なかつた。「それは、コルベールがフランスにあたえようとした繁榮に寄與したことは疑ないが、實際は極めて制限された意味しかもたない事實である。それは普遍的意味をもたらさなかつたし、それと現在の經濟組織との間には何等の關係もあつられ得ない」(P. Mantoux; *Industrial Revolution in 18th century*, 1927, p. 28-33)。フランス資本主義は「大工業」の末裔でなく、その發達のうゑに發展した。それはまさしく「大工業」に抵抗した小規模工業の系譜をつぐものである。イギリスでは、これはより一層はつきりしている。

反獨占運動は初期獨占到反對するばかりでなく、初期獨占をささえる權力的基礎たる絶對君主制に對する權力闘争——ブルジュア革命運動の一環として、展開された。「獨占論争」はかかる廣般な人民闘争の議會的表現であり、獨占到反對した下院は、マツコーレーの云うように、この問題に關する限り「全國民をその背後に見出したのである」。一六四〇年秋長期議會が開かれるや、獨占の苦痛を除けとの請願が全國津々浦々から議會を殺倒した。コールベッペーはさきにその一部をかかげた獨占反對演説を、「わたしは諸君にわが王國の叫びをこだましているのだ」と云う言葉で結んだほどである (*Parliamentary History*, Vol. II, p. 656, H. Levy; *Grundlagen*, S. 33)。

かくして、長期議會はまずその主要な獨占の無効を宣言し、獨占の權力的基礎たる絶對君主制に對する支配力を増大すると共に、獨占者には議席を拒絶する決議を行い、現に一六四一年一月二十一日には四人の獨占者を下院から閉め出した (H. Levy; *ibid.*, S. 33-33)。長期議會のこの行爲とともに、國內獨占は政治的非難となることなくつた (W. H. Price; *English patents of Monopoly*, S. 45-46)。然し初期獨占は一六八八年名譽革命によつて成文法の否定するところとなつた——「」かの「人權宣言」(*Bill of Rights*)は、議會の法律を無視して獨占——國內獨占と貿易獨占とをとわず——をあたえる國王の大權を剝奪し、それを普通法の獨占反對原則と「獨占條例」の規定に從屬さ

せ、〔Ⅱ〕「王室鑛山條例」(Mines Royal Act)は、「銅・錫・鐵・鉛の鑛山は、それから金銀が得られても、それはマイン・ローヤルと判斷し、呼稱し、誤解すべきでない」と規定され、これら金屬鑛業獨占の法的根據となつていた王室の鑛山權を剝奪した(H. Levy, *Ibid.* S. 314)。初期獨占はブルジュア革命——絕對君主制打倒とともに没落する。ブルジュア革命は初期獨占とともに、それをささえる絕對君主制を打倒して、國內産業に關する限り漸次衰えるギルド的地方獨占を除いて自由競争——營業自由を實現する。ブルジュア革命は絕對君主Ⅱ官僚貴族Ⅱ都市貴族の獨占的特權的マニユファクチュアの軌道を私的マニユファクチュアの軌道に切りかえたが、それこそ自由競争——營業自由の意味するところである。かくして、新しく獲得された營業自由こそイギリス資本主義——私的マニユファクチュア軌道の新しい展望を約束するものである。

絕對君主Ⅱ官僚貴族Ⅱ都市貴族の産業政策——レヴィーの Royal Mercantilism, *Königliche Merkantilismus* (H. Levy, *Grundlagen*, S. 99) はここに終りをつけた。然し新しい權威についた議會は直ちに *Laissez Faire* の自由放任政策をとるまでには、まだまだ距離があつた。議會はカンニングガムの所謂議會的コルベール主義 *Parliamentary Colbertism* (Cunningham, *Growth of English Industry and Commerce*, 6th. ed. Vol. II. p. 403ff) ——保護貿易政策を採用した。國內産業には能うかぎりの營業自由、外國貿易に關する國內産業の保護、これが新しいブルジュア議會の産業政策であつた。(註二)

土地貴族Ⅱ都市貴族と産業資本(マニユファクチュア・ブルジュアジー)との對抗抗争はブルジュア革命によつて終つたものでなく、周知のようにトーリーとホイッグの對立として妥協的形態のもとに再現し、新しい議會的コルベール主義をめぐつて相爭う。だが、われわれは舊制度の階級闘争の總決算であり、新時代の階級闘争の出發點であるブ

ルジュア革命を、ここで分析する必要がある。

註一 アダム・スミス『國富論』はその第四編の大部分をあて、重商主義を批判しているが、スミスの概念する重商主義は貿易差額主義―貿易政策に限定されていると見て差支なかるう。と云うのは、スミスの實踐の對象となつていた當時の重商主義が既に royal mercantilism でなく、新しい議會的コルベール主義―貿易政策であり國內營業には比較的競争を許していたからであるう。いずれ、この點については、後述する機會があるう。

本稿は昭和廿三および廿四年の二年間にわたつて、文部省人文科學研究費によつて行つた「イギリスにおける初期獨占の研究」の成果の一部分である。こゝに記してとくに感謝の念をあらわす次第である。